

## フランス語の複合時称

島 岡 茂

助動詞をとって示される完了時称を一般に複合時称と呼ぶが、ここではさらに包括的に完了迂言法とよぶことにする。この形の起源は古くラテン語の盛時にさかのぼり、プラウトスからキケロに至る多くの作家にもみられる。基本的な形をラテン語とフランス語で示すと：

*habeo litteras scriptas*  
*j'ai une lettre écrite.*

大ざっぱの意味は「手紙はもう書いてあります」で、古くは *habeo* の主語と *scriptas* の主語は別人であってもよかった。つまり私以外の他人に書かせてもこう言えたのである。この形は今日の英語の *<I have my hair cut>* 「私は髪を刈ってもらった」と同一である。

さてこの迂言形と古い完了過去形との相違はどこにあるのだろう。 *litteras scripsi* 「私は手紙を書きました」の *scripsi* はラテン文法で完了過去とよばれる。完了はアスペクトだし過去は時間である。この両者はギリシア語以前の印欧語では完了幹とアオリスト幹に区別されていたが、ラテン語では完了幹に対する完了幹として一体化してしまった。この一体化には無理があったためやがて完了幹が弱まり、アスペクト中心の体系から時間中心の体系へと転換が行われた。

この移行を助けたのが他ならぬ完了迂言法の出現である。この形はさきの例でもわかるように最初は *habeo* (*avoir*) が「(ある状態に)維持する、もつ」意味での本動詞だった。過去分詞はある動作として生れた状態をあらわすため、形容詞的性格がつよく、目的語との性数の一致は自然だった。ところが *habeo* がその本来の意味を弱めて、持続のアスペクトを示す機能語の性格をつよめるにしたがって、この持続の因になる行為をあらわす過去分詞がその行為概念をつよめることになった。そこで *habeo* が生きていた時点では現在形だったこの迂言法が、過去分詞に重点が移った段階で完了のアスペクトを強めて完了形になったのである。過去分詞がアオリスト(点)を、*habeo* がその持続(線)を示すという機能の分化が行われ、それによって完了が示されたのである。

*habeo* の機能化は緩漫に行われたろうが、その持続の意味は一般の大衆にもよく感得できたため、すべての迂言法同様、急速に流行することになり、それに逆比例して古い完了過去は完了のアスペクトを弱めて、アオリスト(時間)の性格をつよめていった。この対立的傾向は今日のフランス語の複合過去と単純過去の慣用でもまったく同一で、迂言法はまず民衆の話しことばで流行することになった。ガリアの俗ラテン語で書かれたトゥールのグレゴリウス『フランク史』では、迂言法は作者が人物のことは再現する間接話法の中にみられ、10世紀の『キリスト受難』の中でもつぎの2例は台詞の中にある。

*Tu eps l'as deit.* 「あなた自身がそう言ったのだ」

*per lui medeps audit l'avem.* 「われらはかれ自身からそれをきいたのだ」

この2例とも古い完了過去形とまったく同意で、行為の結果は問題になっていない。

13世紀以前では語順はかなり自由だったが過去分詞の一致はほとんど例外なく行われた。

*Carles li magnes ad Espaigne guastede.* 「シャルル大王はスペインの国土を荒廃させた」

*en sun visage sa culur ad perdue.* 「かれの顔には生色が失われた」

*Toz est mudez, perdue at sa colour.* 「すべては変り、その色を失った」

*Vers le palais a tournée sa teste.* 「かれは宮殿の方に頭を向けた」

さいごの例は今日の慣用では一致しないが、13世紀以前ではまだ過去分詞と目的補語の関連が意識にあったとみえ、ほとんどが一致している。ところが14世紀の中フランス語の時代になると、この意識が薄れ、*avoir* は単に時法を示す機能語になり、動詞が示す行為概念は過去分詞の方に移った。その結果、分詞は名詞をのりこえて *avoir* と接続し、性数の一致が失われたのである。

この一致は17世紀以来、目的補語が過去分詞の前にあるときだけ一致し、後にくるばあいは一貫しないという現在の慣用が確立した。フランス語でこの規則を最初に唱えたのは16世紀の詩人クレマン・マローだが、その論拠となったのは単なるイタリアニズムで、かれが引用したのは *Dio noi a fatti* 「神われらを造り給う」の一行だった。したがってこの一致は完全な文法的拘束とみてよい。

完了迂言法が本来の現在完了の意味よりも、純粋な完了過去の意味をあらわすのは、とりわけてフランス語の特徴とされている。この傾向はすでにガリアの俗ラテン語の中にみられ、数は少ないが古フランス語で使用される迂言法も完了過去を意味することが多かった。この過程はかって俗ラテン語で完了過去が完了のアスペクトを失ってアオリストの時間へ移行したのとまったく同一である。しかもこの移行がまず起ったのは、これまた古代のばあいと同じく話しことばの中である。今日フランス語では話しことばでは過去のテンスに使用されるのは複合形だけで、単純過去は書きことばだけで用いられる。

そこで話しことばで完了のアスペクトを強調したいときに登場したのがいわゆる重複合過去形である：

*En un clin d'œil, il a eu fini.* 「またたく間に、かれは終えて了った」

書きことばだったら *il a fini* か、あるいは単純過去で *il finit* と言うところである。後者が現在形と同一であることも、単純過去形が日常語から消失した一因かもしれない。重複合時称は現代フランス語の話しことばで、古い複合時称がアオリスト化し、完了のアスペクトを失った空所をうめるため出現したものである。

さいごに *être* を助動詞にとる若干の自動詞について考えてみよう。この形もその起源は俗ラテン語で、形式所相動詞がこの形で完了時称をあらわしたことから発した。

*natus est* 「かれは生れた」

*mortus est* 「かれは死んだ」

に倣って俗ラテン語では

*processus est* 「かれは行った」

*ventus est* 「かれは来た」

などの形が使用される。最初の2例は形式所相だから正しい完了形だが、あとの2例は正しくは *processit*, *venit* と言わなければならない。このような類推形が生れたのはやはり完了相を強調したいという日常語の要求に根ざすものと考えられる。